



ピノコパノエツ
セイ集から



私の作家論

pinokopapa

あの暑い夏のことでした

山陰の地方大学で私は、あの学舎と大学本部を全共闘が封鎖しているさなかに、京都大学文学部助教授にして著名な作家であった 高橋 和己氏 の講演会の開催に加わったことがありました。あの時代、こんなことも出来ました。確か、昭和44年ごろであったと思います。バリケードの中で、どんなきっかけからそんな話になったのか解りませんが、高橋氏がこの大学が旧制高校の頃の出身であることを頼りに、講演会を依頼しようということになり、図々しくも直接出かけて行って頼み込んだのでした。私自身は貧乏学生でしたので京都までの旅費が辛く、一度だけ朝早く京都に着く夜行列車に乗り、初回だったか二回目だったかの依頼に同行しました。その頃は京大もバリケード封鎖されていましたが、その整然と積み上げられたバリケードの規模の大きさに、圧倒される思いがしたのは地方大学の学生のひがみだったのでしょうか。そしてそのバリケードも割合なんと言う事もなく通ることができたこと、高橋氏にもすんなり会えたこと、加えて氏が講演依頼にちょっと考えただけで直ぐ応じてくれたことに拍子抜けしたような思いがしたことを覚えております。更に講演には、氏のほかに東大の 最首悟氏 も加わってくれることになり、講演を依頼したこちらの方がびっくりしました。この面会の後、何度か打ち合わせがあり、講演会の日時も決まって、私は謂わば宣伝のために読書会を開きました。メンバー6人で、まるで目立たない小さな立看を書き、学生会館の前に立てました。たったそれだけでしたが、その集会には、色分けすれば右から左まで、日共、反日共、ノンポリ、ノンセクト、ちょっと過激な高校生、右翼学生、そして英文科の助手まで、まるで休戦協定を結んだかのように集まってきました。

先生 スパイにきたんかな

誰が スパイじゃ ここへ来たことが学校にばれたら こっちの首が あぶないわ

そんな会話が飛んでいました。そこは、占拠されている大教室で、そんなにも人が集まるとは思わなかったので、あわててマイクを用意し、それから集会を始めました。

高橋和己氏 最首悟氏の講演会準備委員会として 両先生の講演会に先立ち
云々

と会の開催の挨拶が出来るまで大分のこと、手間取りました。

そして、その時私が選んだ高橋和己氏の著作は 憂鬱なる党派 でもなく

我が心は石にあらず 邪宗門 悲の器 でもなく 散華 と 暗殺の哲学

でありました。

高橋和己氏の二つの作品

散華

暗殺の哲学

は、共に大いに議論が発展するだろうし、いかにも新左翼好みと言う作品を選ぶのはどうかと考えたからでした。会の最初の基調レポートは私が行いましたが、もう40年以上も前のことで、おぼえておりません。しかし高橋氏は、体制に言葉と思想で挑んで行き、極限での人間の思想とそこに表出される行動との落差を、透徹した論理で展開したものが『暗殺の哲学』だと私は思う、とか言ったと思います。どんな高邁な革命思想も行動で現すと、ただの殴り合いでしかないと言った積りでした。そして『散華』は、戦争には参加してはなくても自分の目で戦争を見てきた高橋氏が、戦時に踊った思想と、戦争が終わった後もそれを抱え続けた人を描いたものと紹介しました。どちらも思想を抱え込んで生きている人間を論じ、描いた作品であるというようなことが私の基調レポートでありました。

しかし会は何時の間にか、

暗殺是か非か

一人一殺 近代の超克

いやテロリズムは何も生み出さない

暗殺や蜂起が歴史に悪と書かれるのは

歴史が勝者によって記述されるからだ

明治の元勳達は殆ど皆テロリストだった

と、今にも殴り合いが始まりそうになりました。

待って、待って、この会は暗殺自体を論じるのではなく、極限状態に追い込まれた人間の思想と行動についてと、人間の心の闇の部分までさらけ出すように描いた高橋氏の文学作品について考える会ですよー、あんたら、彼の小説読んでるんですかー、・・・ 主催者としては無責任ですが私は散会宣言もせず、そろっと教室から逃げ出しました。そして後で見知らぬ人に、あちこちで睨まれることがありました。

当の講演会ですが・・・

当の講演会の日、バリケード封鎖された学内に学生が戻ってきました。彼らは普通に学生会館で昼食を食べ、講演会の行われる大講義室の前の、私達が作った開始時間を知らせる立て看に一瞥をくれ、立ち去って行きます。会場の設営をしながら、私達はそれを見ておりました。あいつ等、来るんだろうか・・・、会は成功するんだろうかという思いがありました。そして、会が成功するって、なに？沢山の人が集まるってこと？と準備委員会の学生と首を捻って考えました。そんな疑問が余りに日常的で、このバリケードの中の異常さとはかけ離れたものだと解っていたからです。

しかし、あの 高橋和己氏 が来るのですから、沢山の聴衆に聞いてもらいたいとも思いました。人が集まらなければ、面目が立たない — なんて日常的な考えでしょう。しかし、そんな思いに駆られたことも事実です。そんな私達の横を、普通の、ごく普通の学生が談笑しながら通ります。そこにはごく在り来たりの日常が普通に流れておりました。それを間近に見た私は

ああ 革命は 成らない

と突然解ってしまいました。このバリケードの中の、熱いほどの高ぶりと異常さが馬鹿馬鹿しく見えたのです。私達の闘争は、彼らの日常を変えられていない — そう思い、すっと心が引いて行きました。

高橋氏と最首悟氏は、タクシーで大講義室の前までやってきました。私は会場の

入り口で入場料500円を貰いながら、それを見ておりました。人は会場に立ち見

出るほど集まっており、なお入場しようとやってきております。

1000円にすればよかったなあ

実行委員長が近寄ってきて小声で言います。

革命は 金か！

そう言いたくなりました。

講演が始まったとき、私はまだ外で入場料を貰っておりました。

**** 大全共闘の諸君に、連帯の挨拶を送る！！**

最首悟氏の第一声が聞こえました。私の後ずさりしていた心が、ほっと暖かくなったのを覚えております。そしてその後も笑い声が時を置かず挙がり、最首氏の講演の巧みさが解りましたが、入り口の私には内容までは聞き取れませんでした。

その後高橋氏に替わったのでしょう、柔らかな声がし始めました。場内から声も挙がりません。張り詰めてじっと聞き入っているのが解ります。まるで大学の講義を聴いているようです。私も聞き耳を立てていましたが、高橋氏の声は弱弱しく、聞き取れませんでした。思えば、その時はもう相当に体を衰弱させていたのかもしれない。この講演は、私こそ聴きたかった！文学をするものの責任 — 多分そんな思

いに駆り立てられて、大学も辞し、田舎大学で講演会を開き、ただ生真面目に学生達に語りかける、私はその姿を垣間見ただけでした。作家が時代の良心であるならば、彼こそ真の意味での良心であると思います。私のようなものが論評するのは余りのも僭越ですが、深い教養に裏打ちされた最良の良心であったと思います。我が解体にあったと思いますが、母親に勧められて踊る宗教の踊りまで踊ったのは、高橋氏の母親に対する優しさであったのでしょう。彼はその時39才でありました。彼にはもう少し人生が必要でありました。

高橋氏と最首氏は、翌日広島大学に講演に向かいました。何も知らない、何も解らない私達に、高橋氏は山道を松明を持って駆け連なってゆく邪宗門の門徒の姿を見ていたのでしょうか。少なくとも、私は 盾の会 ではなく、邪宗門門徒でありたいと、当時は思っていました。

あれから40年ほど経っております。

芥川龍之介 について

今本を読んでおります。かつて私は、大江健三郎氏 で止まってしまいました。それ以降誰がいるのでしょうか。四十代に 司馬遼太郎氏 藤沢周平氏 に出会うまで、小説は殆ど読みませんでした。時折、昔読みそこねた 永井荷風 幸田露伴 、読み残した 泉鏡花 谷崎潤一郎 なども手にしたりはしてはしておりましたが、追いか

けるように読みふけることはありませんでした。そんな中、あの

ぼんやりした不安

が頭の隅に残っていることに気付きました。あの石に刻んだ汪兆銘の書のような、無駄も冗長さもない文章は、一言一句見逃してはいけないような気持ちにさせられて、まさに追いかけるように次々とその作品を求め、読み耽りました。そして彼の生涯を追体験するように読み進め、

ぼんやりした不安

にまでたどり着きました。中学から高校までのことです。しかし、そんな未熟者に、

ぼんやりした不安 など解る筈もなく、大学まで引きずり、書簡集も読む羽目となりました。

昭和二年と言えば日本が帝国主義に走り出す時で、それが ぼんやりした不安 だと読んだ覚えがあります。また、吉本隆明氏は 自己の出身階級を否定したことからの 不安 が彼を追い詰めた と あの力強い、強引な繰り返しで芥川を分析しておりました。そして、日本の碩学、加藤周一氏も、日本文学史序説で、ほぼ同様の論評を加えていたように思います。なんか・・・マルクス主義的文芸批判って奴が流行った時期がありましたが、それが進歩的で、新しい文芸批評の手法って奴なんだろうか、そんな取ってつけたような外部の手法に頼って、人間の内面はどこに行ったんだろうかと疑問に思い、芥川氏のことは納得がいきませんでした。

川端康成氏が

作家は、芸術家は、と言ってたかもしれませんが —

古い家の末裔で旧家の最後の煌きである

と言うようなことを、どこかに書いていたように思います。それが 芥川 のことを書いてたわけではないのですが、妙に納得できる言葉でした。旧家の最後の血が芸術に咲き誇り、亡んでゆくと、理解しました。

芥川の

ぼんやりした 不安

なんて言葉が、まだ私の頭の中にあったとは思いませんでした。もう干からびて、かすかすに色褪せた言葉になりおおせておりますが。

読み残した本を、今読んでおります。

川端康成 について

芥川龍之介氏の才気溢れる初期の作品と耽美主義といわれる作品に魅了されながら、つい太宰治氏の本を読み、救われない思いに押し込められて投げ出し、両氏から逃げ込んだのが 川端康成氏 でありました。勿論始めは 伊豆の踊り子 でした。 雪国 山の音 千羽鶴 …… 立て続けに読み耽りました。いくら読んでも、なんの抵抗もなく読み続けられ、しかし今は忘れてしまっています。美しい日本の美がこの作家のノーベル賞受賞の理由だったと思います。

旧家の末裔 云々は 葬式の名人 か 禽獣 に書いてあったことだと思います。この人は 三島由紀夫氏の 師 でありました。そして東京都知事選に、秦野明氏を推薦し、応援演説まで街頭で行っているのをニュースで見ました。

右翼、反動だと当時国文学専攻の、ちょっとファナティックな印象を感じていた学生に、なぜか私は食って掛られました。私が何か擁護するようなことを言ったのでしょうか。テレビの中で老作家が殆ど瞬きしない目を聴衆に向け、しかし聴衆を見ず、感情を押し殺して何かを語ってお

りました。そのそばに候補者が、あたりを睥睨するように見回して立っております。老作家の立っている場所だけ、異空間でありました。そして政治という権力闘争に一番ふさわしくない人が、権力闘争の場に引っ張り出されている　とかいったのではなかったかと思います。

否、そこに立って、反動を助けていることだけでも　社会的責任がある　さらに　かの人の思想にも　そのようなイデオロギー的傾向があるからこんなことが出来るんだ

と国文学学生は言い募りました。確かにこの人はそこに立っている　－　もうそれ以上私は反駁できませんでした。

三島由紀夫氏は虚構の上に虚構を重ね、　仮面の告白　金閣寺　で見せた自らの文学を忘れ、虚構の果てに維摩識を重ねて虚構を連ね、四部作を書いて行ってしまいました。彼の理想は　2・26　の将校であったのでしょうか。　諸君が天皇陛下万歳とさえいえば、私は諸君と連帯して戦う　と言いました。その　2・26　のとき　反乱兵の銃口は、陛下の御寝所に向けられていたことを彼は知っていたのでしょうか。大元帥が満州事変、大東亜戦争を止められなかったことを知っていたのでしょうか。

川端康成氏は、三島由紀夫氏の　葬儀委員長　でありました。それこそが川端康成氏にふさわしい立場だったとおもいます。

眠れる美女　で、昔の自作を原稿用紙に書き写してみる　老作家でありました。

安部公房 のこと

安部公房氏は、全く異質な作家でした。私は安部公房氏は余りよくわかりません。ただ村上春樹氏を読んで、小さな安部公房だなあ とは思いました。しかし安部公房氏ほどのスケール感も

なく、際立ったものもないかなあ とも思い、例の 1984 も読んでおりません。読まずにあれこれ言うべきではないのかもしれませんが、1984 は2～3ページ立ち読みして、置いてしまいました。読んだのは ノルウ

エイの森 ダンス ダンス ダンス 東京奇譚集 海辺のカフカ くらいでしょうか。この人もノーベル賞の声がありますが、安部公房氏を超えてないのでは、というのは、私のような者のいうことではないのかもしれませんが。

しかし、安部公房氏も 密会 まででした。当初、私は彼を SF 作家だと思っておりました。 第4間氷期 から引き込まれ、SF マガジン というマ

ニアックな文芸誌でなにか短編を読んだ記憶があり、あまりその月刊誌も買えなかったのですが、目次に安部公房の名がないか、何時も搜した時期がありました。

ところが、砂の女 が突然話題になり、話題になると臍を曲げて読まない私が、三回繰り返して読んでしまいました。ゴツゴツと頭を叩かれるような文章は何時までも馴染めず、外国文学を読んでいるような気にさせられました。これが映画化されるなんて、不思議でなりませんでした。

しかし今、文庫本のコーナーにある 安部公房氏 の本は、この 砂の女 を見るだけです。ついでに言うと、高橋和己氏 の本なんて、一冊もありません。三島由紀夫氏も、ほんの数冊です。どうしてでしょう。

そして、この人を読まなくなったのは、他人の顔と箱男からでした。えっ、誰もこの構想の小説を書こうとする 安部氏 を止めなかったのか、 と思いながら、読むのを止めようと思いながら、読んでしまいました。このことは私が思うだけではなかったようです。他の人も指摘して

おりました。乱歩氏の着想を貰ったのかと。

あなたほどの人が、そしてあなたが死んでも、後にこの作品は残り続けますよ、ずっと影を引きずりながら残ってしまいますよ と言ってやればよかったと思っています。この二つともが後に残る作品でありましたから。

梶井基次郎 のこと

かつて私は、東京の等々力に三年住んでおりました。この辺りで有名なのは 自由が丘、そこから乗り換えて 九品仏 尾山台 等々力 で、その先に今なら にこたま とかいられている二子玉川があります。ところが三十年以上前のことですから、このあたりも随分田舎で、等々力駅の裏側には未だ藁葺き屋根の建物が残っておりました。と言うより、武蔵野の面影を残すため、保存していたとか。私はその駅から新宿の統計局あたりまで毎日通っておりました。

等々力の駅を降りて線路を越え、直ぐに右に曲がります。すると小さなコンクリートの橋があり、名前をゴルフ橋といったと思います。そのゴルフ橋を渡らず、横から下に下りれば等々力溪谷で、私の好きな散歩コースでした。本当に都会とは思えない、樹林と川の流れが続きます。雨上がりなど足元を濡らし、水溜りを飛び越えなければなりません。距離も割合あり、足元のわるいこともあって、等々力不動尊までは十分以上掛かったと思います。

等々力不動尊は桜の名所でありました。花見と言えば花見弁当を持ってとなるのですが、地元に住む人間が散歩がてら行くのに弁当もないだろうと、飲み物とおやつを一応持って妻と出かけました。行くとき、人から

あそこは気をつけて あぶないから

と言われました。例年喧嘩騒動があつて、死人も出たことがあるから

ということです。その日は下の溪谷からではなく、上の道を歩いて行きました。小さな山門を通ると、パトカーと警察官が待機しており、なにか物々しさを感じました。その 等々力不動尊を祀るお堂の横を下りると人・人で桜どころではなく、座る場所もありません。仕方なく、私達は敷物もないまま、道から外れて斜面の草の上に座りました。やっぱり東京には人が沢山いるんだ、花見にもこんなにくるんだとか敷物を持ってくればよかったと、桜ではなく、人の多さを見て、田舎者が感心したりしていたのですが、飲み物を開け、おやつの封を開けてい

ると、上の境内の方で怒号が聞こえてきました。ホイッスルが鳴ります。人々はちらっと上をみるだけで、余り関心を示しません。なにか、人の嬌声が渦巻き、押し寄せてくるようです。そしてまた上のほうで怒鳴り合う声に妻が怯えて帰ろうと言います。人ごみの中では気分が悪くなってしまふ妻が、怯えておりました。私達は早々に引き上げることとしました。もと来た坂を上がり、境内に出ると、パトカーの横で警官に静止させられた男が二人、噛み付き合うように怒鳴り合っておりました。妻は私の影に隠れ、遠回りして逃げます。下を通ればよかったのですが、下は人で一杯で通れそうになかったのです。その日はそれで終わりました。

その週の土曜日、妻はまだ帰っていないことが解っていたので、見損ねた等々力不動尊の桜を見に行くことにしました。前回と同じ、上の道を歩いて環八を渡り、不動尊の境内に入ります。誰も居ません。境内入り口の露店もパトカーも、花見客もいません。何の喧騒もない、普段の等々力不動尊でした。私は境内から坂を降り、ゆっくりとあたりを見回しました。花びらの散った緑の斜面があり、もう花は駄目なんだと思いながら、下に降りて行きました。濃い、一面ピンクの花びらでした。染井吉野の静謐な花びらではなく、なにか心を狂わすようなピンクの花びらが、坂の下に一面に広がっておりました。そこには誰もいません。その一面の花びらを誰かが踏み分けた様子もありません。背中を誰かが見えています。桜の木の下に引きずり込もうとでもしそうな誰かが、私の後ろにいるように思えます。体が冷たく冷えしました。振り返って坂を上がればよかったのですが、そうすると今私の襟髪を掴んで引き倒そうとでもしそうなものを見そうで、振り返れません。私はそろそろと坂を降り、濃いピンクの一面の花びらの中に踏み入りました。重なった花びらで足が滑りそうになります。倒れたら引きずり込まれる、桜の木の下にゆっくりと、確実に、足元を見詰めて歩き、テニスコート2面程の花びらの上を歩いて渡り、私は知らない道に出ました。一度も振り返らず、です。それだけでなく、道に出ても振り返りませんでした。桜の木の下にはの一文には、死体が埋まっているとありますが、そこに引きずり込むものことは書かれていません。わたしはそのものにいま会ったような気がしました。そして、これは信じていいことなんだよを、怖気を持って思いました。

補遺

梶井基次郎氏の「桜の樹の下には」の一編を読みたくて、松江の古本屋さんから箱のなくなっている文学全集の一冊を買いました。梶井基次郎 横光利一 が合本になった一冊でした。小説家は、いや作家は時に、天の啓示のように美しい一文を得ることがあるのだと知りま

した。

桜の樹の下には 死体が埋まっている

これは信じていいことなんだよ

そして、ああ これは 末期の眼に映った桜なんだと川端康成氏が言う 末期の眼 に映った桜なんだと、思いました。 或る阿呆の一生 も人間失格、豊穰の海もそうだと思います。

今度手に入れた文学全集の年譜には、高橋和己氏は昭和6年生まれで、本籍は香川県三豊郡くに田村、後に三豊郡大野原村に疎開し、三豊中学校に転校したと言う記述を読んで驚いております。

安部公房氏が大正十三年生まれとは思いませんでした。父と同じ世代でした

今の時代には

大げさなタイトルを付けましたが、今の時代には 物語り がない と思っております。それが今の時代の作家達の不幸ではないでしょうか。この作家にして、こんな作品が、というようなものが、かつてはありました。あの 三島由紀夫氏には潮騒とか。瀬戸内の小さな島を見ると

この島は周囲**キロの小さな島である その火を飛び越えて来い

と、そんな文章を思い出します。脱衣場の影から裸で飛び出して手を振り いい人ね いい人は

いいねと話す踊り子 がいました。走れメロスも蜘蛛の糸も清廉な物語でありました。そして、
卍、瘋癲老人日記の作家は春琴抄を残しております。

小説はその時代の美学であるとは、稲垣足穂氏でしたか、澁澤龍彦氏でしたか。美学でなくてもいいんです、なにか物語が、現代には成立しないのでしょうか。何時からか、文学とか小説は、眉を寄せて深刻そうにしているものといった風なことになってしまったようですが、多分それは私小説なるものがでてきてからかと

思います。それが 芥川 を もっと自分をさらけ出せ と責めました。昼間から芸者の下へ、止めよう、妻に悪い、とか思いながら自堕落に、金もないのに行ってしまう、行けば行ったで女からの邪険にされ・・・、そんな小説を書いて、よくぞ書いた と大絶賛され、その返す刀で芥川は技巧派とレッテルを貼り、同時代人のそんな非難が芥川を追い詰めました。そんな、非難した側の書いたものを読みかけましたが、とても読むに絶えず、捨ててしまいました。名前も覚えていません。作品も残っていないでしょう。 芥川氏の作品は、自分をさらけ出しては

おらず、才知を凝らし、技巧に走ってはいても残っています。時が淘汰しました。同時代の評など当てにはなりません。

今、読むに足る文学が見当たりません。時に耐えうる小説が見つかりません。高橋和己氏には、政治に文学は成立するのかと問いかけられました。しかし、かつては蟹工船、党生活がありましたし人間の条件の中には、シベリヤ抑留

さえもソビエト革命のためには必要などと、これに理解を示すような言辞があります。憂鬱な党派のみに政治と文学があったわけではありません。

されど我らが日々は私達世代の小説でもありました。時代にテーマありました。政治のなかにも、戦争のなかにも 文学のテーマがあったと思います。そして、しかつめらしく眉をひそめなくとも、物語も、どこかにあるのではないかと思っています。小屋を焼こうと、鬱病の本屋の子であろうと、なにかを頭で考えたりすることになるでしょうが、胸に残る文学は今でもあると思います。

しかし、ナントカ文学館というものは地味ものですね。松江に居たころ初めて小泉八雲 文学館へ行きましたが、普通の民家程の建物に、八雲氏の所蔵品、本、資料等が展示されているだけでした。芦屋の谷崎潤一郎 記念館、奈良の志賀直哉記念館も、かつてそこにあったように保存された建物でした。文学の有様ってそんなものかもしれません。時代の何かを言葉にする ー そうであるならば、文学は時代の美学、時代の良心なのだと思います。

しかし、よみがえれ、物語りです。おじさんはそれが読みたい。

奇書 と言えば

大阪で シルク・ドウ・ソレイユ クーザ を見てきました。大変な人出で、チケットなどキャンセル待ちだと聞きました。間に三十分の休憩を挟んだ、前半一時間後半一時間の講演でし

たが、始まると腰痛持ちの私が腰痛を忘れて見入るほどの、まさに華麗な非日常でありました。これをサーカスとは呼べません。サーカスの演技は、この舞台芸術の演技の一部にしかすぎず、しかしそれが 華麗な非日常の空間を作り出しています。そして、まさにそれは、人口のパノラマ島奇譚を現出していると思いました。

こんな連想をしたのは私だけかもしれません。パノラマ島奇譚など、安っぽい探偵小説で、いわば、読み本のB級グルメそんな風な扱いです。しかし華麗さ、妖しさからか黒蜥蜴はテレビ化されたり、舞台上で演じられたりしました。ところが、私が江戸川乱歩氏を知ったのは、随分後でした。勿論、怪人二十面相は知っておりましたし、明智小五郎、小林少年、少年探偵団には胸弾ませたのですが、作者なんて知りもしません。それでも少年雑誌の付録だった少年探偵団手帳とかを、親にねだって買ってもらったりしました。また、この歳になっても少年探偵団の歌の始めの二十面相の笑い声は耳に残っています。

ところが、高校生ごろでしょうか、もう江戸川乱歩の名は知っておりましたが、それがエドガー・アラン・ポーに由来するんだと友人に教えられ、エドガー・アラン・ポーって誰？と思ったことから、二銭銅貨、人間椅子、屋根裏の散歩者 など読み漁りました。シャーロック・ホームズ ルパン に比べると、安っぽい仕掛けと貧相な内容だと言う人もおりますが、そしてそんなことからか、江戸川乱歩作品はB級グルメ扱いです。パノラマ島奇譚は奇書だと思います。ドグラ・マグラよりも奇書として数えあげてもよいものだとおもいます。あの徳川無声氏のような語り口が展開する パノラマ島 の模様は思いもよらない妖しさでありました。結末は・・・言わないでおきましょう。奇書にふさわしい終わり方でしたから

このテーマは、そうそう何時までも続けるものではありませんが、友人に煽られて、妙な本を興味深く読んだ時期がありました。その中に 澁澤龍彦氏の 夢の宇宙誌 があります。これはなんでしょう。中世の西洋に巣くった暗闇の部分をも丹念に収集し、我々に見せてくれる、まさに膨大な奇書の中身を丹念に拾い、教えてくれる奇書 であろうかとおもいます。 天使について、玩具について、アンドロギュノスなどちょっと日本人には発想の出来ない、宗教に支配された中世西洋の抑圧された欲望が生み出した畸形なものの解説書でありました。ミロのビーナス、ミケランジェロのダビデ像は、陽の当たる、健全な美の芸術ですが、マリアの微笑を湛えた鋼鉄の処女は残忍な欲望が育んだ畸形の拷問道具でありました。宗教裁判で魔女を作り、火あぶりにして焼き殺したのも西洋の闇です。この西洋の闇を説いているのが夢の宇宙誌です。

そういえば、新書版で肉食の思想というのを読んだ記憶があります。内容は忘れてしまっていますが、西洋の精神史を解き明かして、説得力のあった本だったことは覚えております。

西洋では、ルネサンス以来健全な肉体は美でありました。暗黒の時代も美であ

ったのですが、裸体を描けるのは宗教的意味のある場合のみでありました。ミケランジェロ描くところの協会フレスコ画も、キリストは筋骨隆々でありました。その辺り、なにか私達には馴染めないものを感じます。それが、やはり肉食の思想なのかもしれません。同じ宗教画でも 玉虫厨子 のわが身を飢えた虎に与える仏陀の方がずっと理解できます。これが西洋を理解しきれない、相違点かと思っています。そして、いかにも近代的にして合理主義が全てと、たとえばアメリカを、我々は思っていますが、ローズマリーの赤ちゃん や エクソシスト の映画に見られるように、今だ暗黒の時代を引きずった宗教の国だと言う事をわかっていなければいけないと思っています。そして、その忌まわしさを（・・・と言っているのでしょうか）

耽美的に書き綴ったのが夢の宇宙という奇書であります。

実はこれも 私は 奇書 と思ってきたのですが

四国は八十八ヶ所巡りの、巡礼の地です。一周約1300km、歩き遍路は一日30km歩いて40日ほど掛かるそうです。普通に回るのを順打ち、反対に回るのを

逆打ちと言ひ、順打ちから逆打ちに回って行くと弘法大師に会えると言う伝説まであります。この巡礼という習慣は他の宗教にもあって、聖地に赴くのが一生の夢だとか。チベットでは五体投地の難行で巡礼しますし、ヨーロッパでもそれぞれの聖地にゆくようです。それもキリストの受難の旅に倣い、多くの人が赴くようです。

ツアラトストラもキリストのように、自らの教えを広めるために旅をします。神や絶対真理を否定するのに、その否定するキリストのように受難の旅をするのはどうしてでしょう。絶対真理を否定し、弟子達に自らの意志で生きよと説きながら、受難の旅をします。そしてキリストの復活のように、永劫回帰を説いて死んで行きます。まるで新約聖書のままです。そして、これは虚無主義といわれます。また永劫回帰は輪廻転生とは違うとも言われますが、小乗の解脱は、超人のようです。私はツアラトストラに二度出会いました。二度目は大導寺信輔の半生 からでした。しかし、ツアラトストラは二度読んでも解りませんでした。

それにしても、ニーチェさんは罪なことをしてくれました。神や真理に寄る辺を見出し、大安心を得て生きていたものを、自分で生きろ、永劫回帰があるぞとは。しかし、それも今は皆、殊

更神を否定しなくとも、神に縋らず、寄る辺無き身を不安に苛まれながら生きているのではないのでしょうか。ニーチェさんの哲学がワグナー同様ナチスに利用されたことで危険思想と看做され、かえりみられなっ後、時代が彼を置いてけぼりにして、置き去りにしたまま古びさせてしまいました。時代が取り残して無視した奇書だと思っております。

しかし、それでも人々は安心を求めて、巡礼をするのです。

妖怪 と言えば

げげげの女房で復活した観のある水木茂氏の、境港に車で行ったことがあります。今は、妖怪と言えば境港ということになってしまっていますが、本当は松江だったのではないのでしょうか。なんととっても小泉八雲氏の町なんですから。小泉八雲氏は、松江ではヘルン先生と呼ばれて、今でもそこにいるかのように言われておりました。ヘルン先生は私にも縁のない人ではなく、彼が英語の教師をされていた松江師

範学校は島根大学の前身でした。松江の人は、多分その人が見たわけではないと思うのですが、ヘルン先生は毎日人力車で学校に通っていたと、懐かしそうに話します。

しかしヘルン先生が松江にいたのは、ほんの2年ほどだったはずですが。そしてここで小泉節子嬢と結婚しております。セツ女は士族の子女でありました。この結婚を期に、ヘルン先生は日本国籍を取得し、小泉八雲となりました。しかし八雲氏は日本語が読めなかったため、この妻、セツ女から日本の様々な民話、特に怪談、妖怪の話聞いたそうです。そこから名作怪談が生まれたのですが、松江に暮らしたものとしては、深く思うことがあります。松江の言葉は、出雲ズーズー弁と言って、東北のズーズー弁と一緒にです。更に、庶民と士族は違っており、士族言葉があったそうです。言葉のくせは一生抜けられないもののようなので、セツ女は士族ズーズー弁で一生懸命、夫の求めるままに、アラビアンナイトを毎晩語るように様々な説話を語って聞かせたのでしょう。そしてその愛情が、小泉八雲という文学者を作ったと思います。

しかし、今よりも闇の深い松江の武家屋敷で、ランプの明かりの中、妖怪はセツ女の言葉でかたられたのです。普門院の怪異も、月照寺の石の亀が闇夜には松平家の墓を守るために歩き回ることも、堀川の河童も語られたのだと思います。アルバイトから帰るとき、闇夜に自転車を走らせていると、気のせいでしょうか、

気配がするのです。それが松江でした。

この心優しいギリシャ出身の文学者は

やはり何時までも小泉八雲氏は、心にかかる文学者です。そうだからと言って、怪談ばかり

が中心にあるわけではありません。かの人は、海外における日本人論の先駆者でした。怪談はその活動の一つほどのもので、彼は随筆家であり日本研究家、日本民族研究家、紀行文作家でもありました。

その成果の一つが日本の面影という作品で、特にその中の日本人の微笑と言う文章に今こ

だわっています。この文章は、当時最高の日本人論と言われておりました。

この文章に書かれた日本人のほほえみは芥川の手巾（ハンカチ）を連想させますが、八雲先

生の理解する日本人のほほえみからしてみると、それはその一部一例でしかありません。他に2

例ほど例をあげています。そして、その全てが英国人の体験談です。異文化の衝突の例示です

から、当然の事と思います。

もう英国人が日本に住んでいる時代の事ですから、明治も中ごろの事かと思います。山の手

の英国人が馬で下へおりる最中に、俵夫が人力車を引いて上がってくるのに出くわします。ところが俵夫は間違えて人力車をカーブの下の方に避けます。すると人力棒が道の真ん中の方にはみ出て、馬の肩にぶつかりました。馬に乗っていた英国人はこれに怒り、かっとなって鞭で俵夫を叩きます。すると一瞬俵夫は英国人を見つめ、微笑んで頭を下げて詫びるのです。英国人は一層怒りが増しますが、後で打ちのめされたような敗北感に襲われます。しかし、この体験を語った英国人は、今でもこの日本人の微笑が理解できないと語ります。

二例目はまさに手巾のそれで、英国夫人につかえる日本人の召使いが、微笑しながら主人が

亡くなったので葬式に行かせてほしいと頼みます。夫人がそれを許可すると、翌日早くも帰って来て礼を述べ、笑いながら（声を立てて笑いながら、と書いてあります。これは領けないのですが）骨壺を見せ、これが主人ですと報告します。蓋を開けた骨壺の中には歯が見えたと言英国夫人は言います。夫人は、声を立てて笑いながら報告する日本人の召使いに不信感を感じ、愚劣だと思えます。

かと思うと、古風で礼儀正しい老人の武士を、日本語の教師として雇い入れた英国人は、ま

るで殿様に使えるようにふるまう物静かで慇懃な老人から、暮れに腰にさした大小どちらかの刀を担保に少々お金を貸してほしいと頼まれます。英国人は大刀の担保を取って、お金を融通してやります。

或る時英国人は、その老人に何かのきっかけでひどく侮辱的な言葉をもって老人をののしり

、打擲します。しかし老人は微笑を浮かべながらじっと耐えておりました。しかしとうとう刀に

手をかけ、素早く抜いて英国人の頭上に剣先を走らせ、納めます。そして静かに退出します。英国人は後悔し、老人に詫びようと思いましたが、それはかないませんでした。老人は一通の遺書を残し、切腹して果てました。英国人に打擲されるような屈辱を受けても、暮れにお金を貸しては出来なかった。これは武士として恥であると遺書に書き残し、彼は腹を切って果てます。

これらの例を見ると、英国人には解らなくとも、今の日本人の私にはなんとなくわかる気が

します。

さらに、八雲先生の日本人の微笑

八雲先生は、まず最初に、英国人は大変生まじめであるといいます。それも、表面だけのま

じめさではなく、民族性の根底にいたるまで徹頭徹尾、生まじめであることは、だれもがみとめるところであると言います。それに比べ、日本人はあまり生まじめではなくて、そのぶんだけ、幸福であり、文明世界の中で、今も尚一番幸福な国民であろう、と評します。そして、ここから西洋人の怒り顔と日本人の微笑は、それぞれ相互理解のできない事柄であるといい、先の三つの例をあげます。そして、日本人の微笑は、表面を取り繕ったりごまかしてしまうためのものではなく、民族性に根差した深い意味があることを解いてゆきます。

もっと不思議な微笑の意味も、私には分かるようになった。日本人は、死を前にしても笑うことが出来るし、また、いつもそうしている。

その微笑には反抗も偽善もない。・・・、弱弱しいあきらめの微笑とも混同してはならない

。それは入念に、長い年月のあいだに洗練された一つの作法なのである。それはまた、沈黙のことばでもある。

この引用が、この日本人の微笑についての、八雲先生の結論だと言っていいと思います。そ

して日本人の微笑は、うっとりさせるほどの心地よいものだと思いますが、それが、このことを理解していない西洋人からすれば、事によれば場所柄、事柄をわきまえず笑っていると勘違いされ、激しい怒りをまねくこととなります。そのことから、八雲先生は、二例目の英国夫人に、この家政婦の態度が、無情であるどころか、まことに立派で、大いに感動させうるものであることを理解させるのは、まったく不可能であろうと結論付けます。そして更に八雲先生は、日本人の微笑について考察を進めようとしています。

そのとき、八雲先生は、日本人の微笑を理解するためには、日本古来の、自然な、民衆の生

活に踏み込んで行きます。この時、近代化された上流階級からはなんら学ぶべきものはないと言い切ります。八雲先生には、日本人は明治以来に始まった高度な西洋教育を身につければつけるほど、心理的にますます西洋人から離れて行くと見えていました。完全に近代化された日本のエリート階級は西洋の思想家との間に知的共などまったく存在せず、日本人の側に冷たい、申し

分のない礼儀正しさが見られるようになるだけである、と言います。これには多分、八雲先生の中に一種の前提があると思います。西洋の教育は、知性の拡大と情緒的な感性の広がり、深化を結びつけて育てるものだと思っていると述べていることから、そうと解ります。日本人もかつて、月を愛で、花を愛し、四季折々の情緒を歌うようになりました。それは主に中国の漢詩から啓発されたものでした。月は美しいものだ、花を愛でようと知るようになって、情緒的な感性が広がりを増しました。しかしこれは学問ではなく、身につけておくべき教養であると心得ていたのではないかと思います。つまり、西洋の教育は実学としての学問であって、教養とは異なっていると区別していたのではないかと思うのです。更に江戸時代の昌平黉、藩校は、四書五経が中心の教育でありました。ですから、高等教育をうけたエリート階級は、申し分のない礼儀正しさをおのずと身に着ける事を是とするようになったのだと思います。優れた古典文学や詩を暗唱できることが、西洋の高度な教育の一環でありましたから、それを前提にする八雲先生には、そのような日本人は不可解に見えたことでしょう。

八雲先生の考察 一更に一

八雲先生は、日本の教育に更に踏み込んで行きます。明治以来始まった西洋式の高等教育は

必ずしも満足のいくものではないが、古い体制に育った日本人の中に、決してほめ過ぎにはならない礼儀正しさや、無心無欲や、善意に満ちた優雅に、われわれはであうことがある、といい

ます。ところが、当世風の若い世代の連中のあいだでは、こういったものはほとんど姿を消しており、卑俗な模倣と、陳腐きわまる浅薄な懷疑を唱えることもできずに、いたずらに古い時代と古い習俗とを嘲笑するようになってきていると言います。

八雲先生は、日本人のエリート階級とかインテリ階級ではなく、一般民衆の自然な生活の中

からのみ、日本人の微笑の意味を理解できる理由を知ることが出来ると考えます。生来の日本人としての一般大衆は、生にも、愛にも、また死に対してさえ、等しく微笑をもって迎える、おとなしい、親切な人たちで、この人たちとは、単純な、自然なものに心通わせることのでき、親しみ、打ち解けて行けて、そこから彼らの微笑の意味を知ることが出来るようになるというのです。元が英文からの翻訳ですから、なかなか文意を読みほぐすことが難しいのですが、日本人からすればくすぐったくなるほどの表現で記されております。そして、日本の子供は、人生そのものを微笑をもって迎えるという幸福な性向を、家庭教育の全期間を通じて育成されます。それは庭木の自然な習性を伸ばすように、丹精込めて育成され、教え込まれるものだといいます。そして、その入念な美しい作法、立ち居振る舞いの向けられる先に考察は及びます。

日本人は、わが身に起こった不幸を、他の人に直際に、それも感情のまま伝えることを不躰なことと感じ、もし取り乱したりすると「はしたないことをして、申し訳ございません」と詫びます。わたくしごとで、他の人を不愉快にさせたりすることは非礼なことで、道徳的なことではないのです。そして、そのようにふるまうことは、もはや本能的なものにまでなっており、身に備わった美意識でさえあると八雲先生は言います。八雲先生は他にも色々と言葉を尽くして語ろうとしますが、もどかしいほどの的確な表現が出てこず。苛立っているようにも読めます。ですから、日本人の微笑を、美德としてのつつしみとも言います。さらに堂々巡りをして、またも、苦しいことや衝撃的なことを伝えなければならなくなった時、いつも苦しむ本人の口から微笑をもってかたられるというのが、この国の習性であると言います。さらに、この不可解な微笑の秘密は、日本人の礼儀正しさにあるともいいます。日本人の側からすれば、今もこのように振る舞っていると反省しますが、それが礼儀正しさから来るものとは意識してはおりません。それをまた、先生は本能的な次元まで育成されたものだということです。

八雲先生の考察は更に多岐にわたり、深まって行きます。先生は京都で出会ったお地蔵さ

まと、それを拝みに来た10歳ほどの男の子の思い出に及びます。お地蔵様は、美しい童子の姿であり、その微笑は神々しいばかりに真にせまっていたと言います。そしてそのお地蔵様の前で小さな手を合わせる男の子の無心な微笑は、不思議にもお地蔵さまの微笑にも似て、少年は地蔵の双子の兄弟のように思われたのです。八雲先生は「聖堂や石の像の微笑は、たんなる模写ではない。仏師がそれによって表そうとしたものは、民族の微笑の意味であるにちがいない」と思い当ります。日本人の微笑は、菩薩の微笑と同じ概念一つまり、自制と克己から生れる幸福をあらわしている。それは西洋が宗教的思索に思い煩っているほど、日本人はそうした問題に煩わされていないからで、それは仏教の教理には西洋の神学より、ずっとはるかに深いものが含まれており、われわれは思索の達しうるぎりぎりの極限まで船を進めて行って、水平線がなお消えないことがわかったのですと、日本人に語らせています。このことは、日本の文化を考察するうえで、西洋の文化を対象のものとして比較しているので、こうした結論に結びついてくるのだと思います。しかし八雲先生自身は、その前提である西洋については多くを語っていません。八雲先生はある論文から引用して、西洋の社会形態は、誰しもが持っている利己心をほしいままに振り回し、人間の欲望を自由に発達させ、華美と浪費を極めてようとするには甚だ魅力的である、要するに人間の利己心の自由な活動に基づいている社会形態だと言っております。ですから、西洋では、社会的混乱などほとんど関心をよびません。時代が変われば混乱するのが当たり前で、もし混乱が起こり、人間の利己心、欲望が自由闊達に活動できない社体制にこそ問題があって、それを解決することが社会体制をより良く改革することに繋がると考えます。人間の利己的欲望が満足させられないのは、社会体制に誤りがあるから、これを改革しなければならないと、西洋では考えるというのです。これは、日本人論を書きながらの、西洋文明の批判であると思います。

そのような利己心と欲望に基づいた社会体制は、それらに寄与するための倫理や道徳などで

は治まりません。人間の願望が自然の法則をつくるという進化論を単純に信じて疑わない以上、

それは失意と墮落に終わるに違いない。闘争を続けるのが、彼らの運命なのである。と、かなり手厳しい西洋文明批判を展開した論文を、かなり長く引用します。八雲先生は稀有の文学者ではありますが、社会学者ではないので、自分の納得した論文をここまで引用したのだと思います。その後、急速に西洋化、つまり近代化してゆく日本が次第に失ってゆくであろう道徳的な特質を先生は予想します。日本は西洋のもっとも優れた思想家たちが、もっとも幸福な最高のものとみなしている社会形態を、限られた範囲ではあるが、いくつか実現していたのであると言います。神とか絶対的権威とか王権神授説を捻り出して、その名をもって権利と義務を社会契約として法律とし、やっと社会的体制の小康を得ているだけの西洋に対して、日本をこのように評価します。しかし、資本主義なんて言葉は使ってはいませんが、古い日本が資本主義に経済体制を移してゆく過程で、多くのものを失ってゆくだろうと、悲しみとともに語ります。その言葉は、詩的でさえあります。

かならず日本が振り返って見る時があるだろう。素朴な歓びを受け入れる能力の忘却を、純

粋な生の悦びに対する感覚の喪失を、はるか昔の自然との愛すべき聖なる親しみを、また、それらを映していた、今は滅んだ驚くべき芸術を、懐かしむようになるだろう。かつて世界がどれほど光に満ち、美しく見えたかを思い出すであろう。古風な忍耐と献身、昔ながらの礼儀正しさ、古い信仰のもつ深い人間的な詩情—こうしたいりんなものを想い悲しむことであろう。その時日本が驚嘆するものは多いだろう。が、後悔も多いはずである。おそらく、その中でもっとも驚嘆するものは、古い神々の温顔ではなかろうか。その微笑こそが、かつての日本人の微笑にほかならないからである。

ながい引用になりましたが、もはや私ごときの解釈を越えております。全ては、優れた文

学者、ラフカディオ・ハーン、ヘルン先生の文章に表されていると思っています。

谷崎潤一郎氏について

芥川龍之介氏は私の一番好きな小説家でありましたが、その芥川が先輩、谷崎潤一郎氏について書いた文章があります。

僕は或初夏の午後、谷崎氏と神田をひやかしに出かけた。

という書き出しで始まる文章で、これは随筆ともメモとも言い切れない、ただ谷崎氏と三保をしたことを綴った覚書ほどのものじゃないかと思いますが、これが活字で残っているのですから解らない。

谷崎氏はその日も黒背広に赤い襟飾りを結んでゐた。僕はこの壮大なる襟飾りに、象徴せられた

るロマンティシズムを感じた。

ここに芥川のレトリックがあります。言い換え、思い込み、一面からしか見えてないこと、そ

ういったことを先ず当たり前のこととして書き進み、その内に僕等は裏神保町の或カフェへ腰を下した。何でも喉の渇いたため、炭酸水か何か飲みにはひつたのである。

と、舞台をしつらえ、白粉の剥げた女給というジョーカーを登場させ、一気に舞台をひっくり返しにかかります。

女給は立ち去り難いやうにテーブルへ片手を残したなり、しげじけと谷崎氏の胸を覗きこんだ。

「まあ、好い色のネクタイをしていらつしやるわねえ。」

襟飾りってなんですか？そう、赤いネクタイ。

僕はこの先輩の冷笑にも羞ぢず、皺だらけの札を女給へ渡した。女給は何も僕等の為に炭酸水を運んだばかりではない。又実に僕の為には赤い襟飾りに関する真理を天下に挙揚してくれたのである。僕はまだこの時の五十銭位誠意のあるティップをやつたことはない。

ほんの短い文章ですが、この、詐術とでも言つていいレトリックで、芥川は一文をものしております。そして、そんなカラクリの目立つ短文で、谷崎という人を全て書き表していることに魅せられてしまいます。芥川好きが過ぎるでしょうか。

谷崎潤一郎氏について-2-

その谷崎潤一郎氏の代表作はといえば、春琴抄、細雪、痴人の愛と並びますが、陰翳礼賛は日本の美を語る数少ない随筆ではあります。しかしこれはあまりに有名で、ご紹介しなくとも知れ渡っておりますので、おいておきます。

しかし、一九六四年ころだったと思います。我が大谷崎はノーベル文学賞の日本人一番の候補者

であったはずですが。彼のほかに、三島由紀夫、川端康成、西脇順三郎氏らの名が挙がっております。残念ながら、谷崎潤一郎は翌年逝去しております。亡くなった人にノーベル賞は呉れませんので、残念なことでした。しかし、この文豪の書いたものは、何だったのでしょうか。一つのテーマであったと思います。世にいう言い方をすれば、耽美主義、女性を女神ほどに崇める女性愛、マゾヒズムといった言葉が並びます。そのどれも当たっているのでしょうか。言ってみれば、変態も極めれば純文学ということでしょうか。ちょっと極言しました。しかし、ウラジミール・ナボコフは大ベストセラーの文学を生み出しました。いまではごく当たり前の言葉になっておりますが、当初は、あのアメリカでどこも発行してくれなかった代物でした。ロリータがそれです。それどころではありません。夏目漱石のそれからは明治日本の姦通小説で、これはのちの氷点に通じるものでありました。文豪もすべてがロマン・ローランのようであるとは限りません。トルストイ、ドフトエフスキーばかりが文学ではないということでしょうか。サドマゾこそ、マルキ・ド・サドも悪徳の栄えから知れ渡りました。眼球譚のジョルジュ・バタイユ、我が隣人サドのピエール・クロソウスキーなど、フランス有数の思想家、哲学者として名の上がる人たちもいます。

まさに、変態も極めれば、大文豪です。

春琴抄について書きたかったのですが、また後ほど。

高松の大きな書店で、文庫本の中から徒然草と方丈記を選び、握り締めておりました。ところが本棚の回りを一周すると小泉八雲集が目飛び込んできました。この、日本を発見してくれた外国人の文学者の著作は、いま見捨てられたようになっています。日本の美しさを発見し、帰化してこの日本に骨を埋めた文学者を、日本人は忘れすぎています。先日、到底無理だと思っていた、ドナルド・キーンさんの公演をこの香川の地、高松で間近かに聞くことができました。この高齢の日本文学研究家の公演は、三島由紀夫までの日本文学に浸りきっていることを実感としました。そして、あったこともなく、声も知らない文学者ラフカディオ・ハーン先生の、松江で見た記念館に飾られていたポートレイトの横顔を思い出しておりました。

この小泉八雲集は、彼が英語で書いた文章を日本語に訳したものです。小泉八雲氏といえば 怪談 という事になるのですが、それは八雲先生の文学の片方の芯をなしているだけだとおもいます。それは、八雲先生の日本への関心の一部でしかなく、いまの日本からは忘れられた、古くて美しくて霊的な日本への慕わしさが綴られた文章にこそ、八雲先生の心はあったと思っています。しかしこれが手に入らない。私は小泉八雲集を見つけた途端、徒然草も方丈記ももとへ返し、それをさっと手に取りました。目次を見ると、昔断片的に読んだ文章の題名が並んでいます。これこそ先ず読まなきゃと、今手元においてあります。キーン先生の 美しい日本 つまり 果てしなく美しい日本 という本を読むと、跳び級で名門大学を卒業し、更に外国の大学と日本の大学に、奨学金で学んだ日本学者の分析になる日本学を読むといった感想を抱かされます。的確で冷静で、かつ日本への愛情を感じます。キーン先生のお人柄と思います。八雲先生の書かれているのは、時代が違うといえはその通りですが、闇があって静けさがあって、気配がする日本でした。そういえば、松江の直ぐ近くに、この気配のなかに妖怪を見ていた人がおりました。水木しげる氏です。その気配を尊び、清めて囲い、お祭すれば神道。恐れて逃げ出せば、妖怪。そんな共通点から、山陰は 霊的な日本 なのかも・知れませんが。八雲先生の語るころは、キーン先生とは違い、染み入るように日本を語ります。日本人の微笑、知られぬ日本の面影、作家の日本に身を寄せての感性を感じます。果てしなく美しい日本の序文を、今回初めて読みました。キーン先生は時間軸での日本の発展とその影を綴り、今日までの日本を語り、日本の台所やお寺にいる人々、学校、オフィスの中を写さない写真家とは異なって、そこに日本の日常があり、その日常の中で、キーン先生の関心があることを語っています。それぞれ語り口は違っていても、ただ有難く思えます。低頭、遥拝。

遊びをせんとやうまれかえむ 戯れせんとやうまれけん
遊ぶ子供の声聞けば 我が身さえこそ動がるれ

この二行を書けば、もう何も語ることはなくなってしまふ思ひです。あまりにも有名な、しかし本当はあまり知られていない古典です。梁塵秘抄、後白河法皇の編纂といわれている、今様、法歌の歌集です。1180年ごろですから、800年ほど前の、歴史に名を残さなかった人々の、まさに心情を歌ったものだと思います。歌そのものはあまり残っておらず

仏は常に在せども 現ならぬあはれはる
人の音せぬ暁に ほのかに夢に見え給ふ

というこの歌もよく知られてはいるが、出典は知られていないという不思議な古典で、素敵な恋の歌もあります。WEB上でも数首ですが読めますので是非ご一読をお勧めします。日本人はこんなにもやさしい心で生きておりました。

恐縮です。

衣ずれの さわさわさらり 闇のなか

(きぬずれの さわさわさらり やみのなか)

私の拙作です。梁塵秘抄のなかの素敵な語感に習いました。

閑吟集です。1518年、室町時代の小歌集で、完成時期とまとめた人が他とは違ってはっきりしていて、ちょっと珍しいものです。じつは表題の小歌は何かで知っていたのですが、徒然草の18段だったかにこの閑吟集の事が書いてあり、そのことから興味を持って読んでみると、そこにこの歌が入っていて、逆にびっくりしました。

と書いたところで昨日は終わりにしたのですが、ここで大きな間違いがありました。岩波文庫版の閑吟集を改めて開いてみると、監修者は序文で、あえて名前を明かさず、

ここに一狂客あり

と書き始めていたのです。そして、

小歌の作りたる、独り人の物にあらざるや明らけし

風行き雨施すは 天地の小歌なり

流水の淙淙たる

落葉の索索たる

万物の小歌なり

命にまかせ、時しも秋の螢に語らいて

月をしるべに記すことしかり

と、すこし長く引用しましたが、教養のある、歯切れのいい、確たる文章で、このあたり、方丈記の少し詠嘆的などころとは違っているようにおもいます。

また、閑吟集とは直接に言うてはおりませんが、司馬遼太郎氏の、この国のかたち の 三 の 室町の世 の最後の辺りに、

一期（一会）と言う言葉も流行した。踊りながら歌う今様の中に、「なにせうぞ くすんで一期は夢よ ただ狂え」という歌詞があるが、これはおのれへのはげましであって、虚無的なものではなかった。

と記されています。間違いしておりましたので、正確を期すために頭をひねって原文を探してみました。

梁塵秘抄もそうですが、閑吟集に集められた311首は、司馬遼太郎氏の記されたように、小歌、今様としてその時の人に歌われていました。どのように歌っていたのでしょうか。残っていないだけに余計聞いてみたい気がします。表題の歌のほか、

ただ人は情あれ 夢の夢の夢の

今日は昨日の古え 今日明日の昔

これは 114番目の歌ですが、この 今日昨日の古え 今日明日の昔 の言い回しなぞ意味深くて心に残ります。そして短く、

さて何とせうぞ 一目見し面影が 身を離れぬ

と歌います。閑吟集はそのおよそ三分の二が恋の歌です。しかし、

花籠に月を入れて 漏らさじこれを 曇らさじと 持つ身が大事な
といった風情あふれる室町の遊び心を偲ばせる歌もあります。

憂きも一時 うれしきも

思い醒ませば夢候よ

やはり恋の歌です。このような一節を、

うたへやうたへうたかたの

あはれ昔の恋しさを

今も遊女の舟遊び

世をわたる一節を

うたひていざや遊ばん

と歌ったのでしょうか。

因みに狂えとは踊り狂うの意味とも言われております。

しかし、本当にどんな風に歌ったんでしょう。聞いてみたい！

閑吟集の中で、特に好きだったものがどこに書いてあったか見つからず、書けませんでした。つぎの一首です。

あまり言葉のかけたさに

あれ見なさいなう

空行く雲の速さよ

すなおな歌で好きでした

取り立てて中世の日本文学を語ろうなどとは思っていませんが、学生時代ひどく夢中になって読みもし、歯が立たなくて投げ出しもした本が多々あったその中で、ほぼ中ほどまで読んだのが、今昔物語でした。その本は今も手元にありますが、大学から帰ってくる時、どこをどう間違えたか、5巻のうちの第一巻がありません。抜け落ちたのか、置いてきてしまったのか、持って帰ってもう40年以上、放ったままになっておりました。いま、母の家の本箱の中で、歯の抜けた口元のように、2巻から5巻、並んでおります。

日本霊威記、宇治拾遺物語、雨月物語と並べると、妖怪、怪綺談ばかりですが、雨月物語は全部、宇治拾遺は途中で今昔物語と重複しているのが目に付いて、あとで読むことにして放置し、日本霊威記は仏教臭く、しかも生硬な、漢文の読み下し文のようなところが飲み込めず放棄して、今思えばさんざんな読書歴でした。それでもこの類の本への興味はさらに増して、聊齋志異3巻、里見八犬伝と買いあさりました。聊齋志異は平凡社の、里見八犬伝は??の復刻版で、中に版画摺りの挿絵が両方とも入っておりました。これらが読みたくて、かといって、そう自由になるお金を持っているわけもなく、見つけた古本屋のその本の値段と見合うかと思われる量の本を持って、その古本屋へ行くのです。古本屋の主人の前の机に持参した本を置くときは、不安で息が詰まりりそうでした。頭の薄くなった店主も、一瞬で顔が変わります。こっちはガラクタのような本を持って行ってるのですから気が気ではありません。店主が査定している間、私はお目当ての本を目で探し、確か値段はこれだけだったと足らなかった時のために用意してきた財布の中身と、買い取ってくれるだろう金額をもう一度足してみるのです。そしてたいていの場合、思ったよりも少なかった金額に、それに倍する金額をたしてお目当ての本を買う羽目になります。足しても買えないことだってありました。本を売った後に、お目当てだった本を店主の前に差し出すと、あの厳しい顔はもう平生に戻っており、別に何の表情も浮かべず、私からお金を受け取ります。どうしてでしょう、他の客には有難うございましたといってるのに、私には言ってくれません。お金を受け取り、本を渡してくれるだけです。でも、いいんです、私は本を買いました。持参した沢山の本と付け足したお金で、新しい本を買ったのです。それがいま手元に残っている本たちです。それじゃあ、本数は減る一方だろうと思われるでしょう。私はまた格安の本を買って、読んで、ため込んで、をくりかえしてましたから、そうでもなかったんです。日本古典文学全集、世界の思想、日本文学館全集、日本の文学、手元にある本のタイトルの上を見ると、これらの名前が並んでいます。なぜ、岩波文庫にしなかったんでしょう。そうすれば左程のこともなかったでしょうに、あのときは思い付きもしませんでした。休みといえば、自転車であちこち走って、あげくに古本屋さんに入り、そこで見つけるもんですから思い込んでしまってたんでしょうね。そうして買った本が、いま手元に残っている本たちです。

この貧乏学生のどういはいか解らない行動の元になったのは、芥川でした。要するに、彼の真似です。今昔物語から題材を得て、鼻を書き、羅生門、芋粥、地獄変と進んだ彼の人の模倣をたくらんで、私も題材を得ようと読み漁りました。それがきっかけでした。さほど学もなく、受験勉強の古典の知識ほどで大古典を読もうというのですから笑止です。それでも辞書も引か

ずに読みました。するともう読むことが目的になり、あれこれと手を出しては齒が立たず放り出して、その積み重ねの跡が、いま手元に残った本たちだとも言えます。

しかし、一篇だけ、小説を書きました。大学の文芸部の発行する文芸誌にそれを載せました。いと美々しき女房の、というのが、その題です。なにか麗々しい題だと自分でも思います。しかし、これは宇治拾遺物語のなかの文章をそのまま使ったものです。

今は昔藤大納言忠家といひける人未だ殿上人におわしける時いと美々しき色好みなりける女房と
という、ほんの短い説話からヒントを得て付けた題名でした。もう種明かしをしましょう。この原文そのものの題は

藤大納言忠家物言心女放屁の事

でありました。なんとも底意地の悪そうな題材を選ぶところが、芥川じみていると、その時の自分も思ったことでした。ですから、文芸部の講評会では仕方なく取り上げられはしましたが、適当に端折って余り批評もされず終わりました。特に女性部員からはかすかに顔をゆがめられて無視されました。会の後、先輩から芥川好みではあるが、**君らしくてよかったよと個人的になぐさめられたことでした。しかし、ちょっとシニカルだったかな、が先輩の一言でした。

さて、このいと美々しき女房の、であります。小説を書いている方に再録しようかとも思いましたが、手元にその時の機関誌がなく、再度同じ題材で書くのも気おくれする感じなのでやめました。話は朝廷の夏の氷献上の事から始まります。

朝廷へ夏に氷を献上するのは、もう日本書紀の時代からその記述があり、そのための役職まで設けられておりました。平城京の折には春日山に氷室があり、平安京の時は京都の右京区左京区その他、沢山の氷室が設けられて、献氷の勅祭が行われておりました。その届いた氷で夏の暑さをはらおうと、女房たちがもていさわでいるところに藤大納言が通りかかり、廊下でコホンと咳をします。すると笑いさざめいていた女房たちの声が一瞬止み、一人が廊下を覗いて彼を見咎めます。そして藤大納言の手を取って部屋に案内し、木桶に浮かんだ氷を勧めます。しかし老いて、実直だけが身に着いた大納言は、これはお上からあなた方にお下げ渡しになったものと辞退します。それをなお女房たちは敢えて勧め、氷を浮かべて冷たくひえた水を手に取らせて、先日亡くなった大納言の妻の事を聞き出そうとします。当時では珍しく、彼は一人の女性を守り通して終わったからです。彼は女房たちの誘いについ乗って、ほろほろと妻とのなれそめを語りだします。そのクライマックスが、あの説話になります。

若かった時の藤大納言は世の常にならい、恋の手順に従って、顔も知らない、評判だけは聞いている女たちに花に添えて恋の和歌を送り、関心を買おうと努めますが、さほど風采も挙がらず、添えた歌も下手くそで誰も相手にしてくれません。ところが評判の色好みの女房が文だけは返してくれたので、夜忍んでゆきます。この女房が文を返したのは、実は家柄も大したことない若造をからかってやろうという他の女房どもと図ったばかりごとでした。そうとも知らず、彼はおずおずと部屋の前までやってきて、女房の名を呼び、なにやら歌を詠んで聞かせます。女房は吹き出しそうになりながら、ここで追い返して恥をかかせるはずが急に若造の顔を見てやろうと思立ち、彼を部屋に招き入れます。そうすると、矢張りなにやらもぞもぞと聞き取りにくい

声で埒もない話をする若造だったので、きつく侮辱して帰そうとするのですが、ここで不意に異変を覚えます。若造はなおもつまらない話を続けます。女房は追い帰そうとものを言いかけては声も出せないで、じっと耐えます。その苦悶の表情を彼は世の評判に似ずあえかなりと覚え、つい側に寄り、抗わぬ女房を抱きしめようとします。するともうそれまで耐えに耐えてた女房が高らかに放つのです。不意を打たれた藤大納言は一瞬事態が飲み込めなかったのですが、はっと気づき、ああ世は無常だ、必ず出家せんと、思うも走るも一緒になって、こけつまろびつ駆けだします。そして自分の部屋に走り込み、もう一度、必ず出家せんと繰り返します。そうして虚ろな精神状態のまま身の回りの物もち、外へ出ると月が煌々と輝いています。と、一度に思いが至ります。彼の女も人、我も人、そう思うと彼はしっかりとした足取りで、女房の元へ引き返します。そして、すすり泣きの聞こえる部屋の前で女房の名を呼び、帰れと言うのをきかず、部屋に上がって女房ににじり寄ります。そして、ああそんなにしてまで、私を辱めるのですかという女房を抱きしめ、妻に、妻にと繰り返します。

御所の女房達にはそこまでの話は決してしませんが、よく尽くしてくれた、この上なき妻で、もう他の女性には目もむきませんでしたと語り、はなやかな笑い声を背に、藤大納言は袖でそっと涙をぬぐいながら去ります。

他にもいくつか小説にしようかとおもった題材もみつけたと思うのですが、いまはむかし忘れてしまいました。

今昔物語は、芥川のみならず、多くの作家がそこから題材を得て小説をものしているようです。しかし、全巻揃っていないこの今昔物語だけは残して、後を市の図書館に寄贈しようと、いまは思っています。

舞うことと歌うことの源は

中国で漢字が生まれたのは、それを卜占に使うという目的からでした。殷代に甲骨文字として亀甲獣骨に刻まれ、熱した金属棒を差して、それが割れてゆく模様から吉兆凶兆を占いました。勿論文字は記録性もありますから、それだけに終わらず、文字が考えだされた瞬間からその役割を拡大してきたことでしょうから、その発明は偉大だと言えますでしょう。しかしその論が今回の目的ではありませんし、そこまでの知識も私にはありません。

しかし、このデジタルな時代に歌はあふれています。ところが今一番の情報宣布の手段足るテレビには、情報としての歌は大して価値を認められていないのか、つまり売れない、買い手のない内容に成り果てたのか、ほとんど見られなくなってしまいました。それでも歌はあふれています。デジタル情報としてスマートホンに蓄えられて、イヤホンという極私的な伝達手段で再生され続けています。この一点でも見るべきことがあります、それはそれ。歌と舞いに私が感じていることとは離れたことです。

歌という漢字のもとの成り立ちは、歌の編の中の二つの口の形の箱に神への願い事を書いたものを入れ、その前に先の曲がった棒をもった人が入れ物を叩いて示し、願い事を成就してくれるように祈願する様を形取ったものと言われております。

舞という漢字は、両手に呪符をもってくるくと回り踊るさまであるとのこと。

つまり、両方とも元の成り立ちは、神への祈りでありました。そしてこの祈りと言う字は神の意志をたたえ、祝うということでもあります。なにかふるめかしくなりましたが、舞い歌う日本の最初は、神話の世界でアメノウズメノミコトでありますから、日本はその成り立ちからあっけらかんとして、深刻ぶったところがありません。アメノウズメノミコトが天岩戸の前で歌い、舞い、その様を見て乳が踊る、腹が揺れると八百万の神々が大喜びして手を叩き、陽気に大笑いします。これが起源となって、神楽舞が出来たとも言われておりますが、どうなのでしょう。しかし、古事記と離れてみますと、たとえば宮古島などに神歌がいまだ残っております。これは先ほどの祈りの漢字の成り立ちそのものの意味で、神に意志を問い、その意思を称えて祝う歌であります。さらに神歌は960年ごろに編纂された神歌抄が国宝として残っているそうです。そして神楽歌になってゆきます。歌い、舞う、と言うことの始まりはどうも神楽にあるようです、ちなみに、さきほどの祈りの語源の説明のなかの、祝うというのは和讃とでもいうべきことで、たとえそれが不都合なことでも、示された神の意志に従い、称えるということです。そのあたり、中国の卜占は凶兆が出れば、何度でもやり直し、どうしても上手く行かなければ、整わずと、なかったことにしてしまったらしいです。これもまた中国らしいことです。

私の名作ベスト10

齢を重ねてきますと、次第に本が読みにくくなってきますが、それでもつい追いかけて本を読んではしまいます。ところが、リタイヤした今は、時間ができたがゆえにあまり読まなくなったりもしています。本を読む気力が萎えてきたのでしょうか。それとも読みたい本がなくなったのでしょうか。本屋さんに行くのです。行ってうろうろ回ってみます。新刊の棚も背表紙を眺め、平積みになった本の表紙も、時に帯もチェックします。でもそれだけ。手にとっても、買ってまで読んでみようとは思わなくなりました。新刊本はそうですが、文庫本のところはじっと考えたりしないで、手が伸びます。この本は読んでなかった。ほう、この人のこんな本が出てる。それは知らなかった。と、気持ちが動きます。それは、自分が知っているからかと思ったりします。新刊の新しい作家さんのことは、知らないから興味がわからない。そうだと思っています。けっして、今の日本文学は衰えたなんては思っていない。そう思いたいじゃありませんか。もう高橋和巳、三島由紀夫、大江健三郎で終わったなんて、自分の不勉強を棚に上げて、偉そうに言い切ったりしちゃ駄目と思っています。

しかし、名作ベスト10ぐらいは考えてみてもいいのじゃないでしょうか。例えば第一位、古事記、第二位、源氏物語、第三位、徒然草、第四位、太平記、第五位、今昔物語、第六位、曾根崎心中、第七位、好色五人女、とならべてみると、日本の古典ものばかりを並べてしまいました。これは私の趣味の範囲での選定ですから、続けてみますが、第八位、泉鏡花の全般、第九位、芥川龍之介の全般、第十位、川端康成の全般。こうならべてみると、私が何を読んできたのか、一目でわかります。そして、この中に入れなかった本もまだ書き並べたくになります。もう何位とかではなく。

外国文学も読んで来てます。ですからこれは別立てで考えてみたいと思います。ところが、日本ほど昔のものがないのです。よく言われるところですが、源氏物語は世界最古の文学でした。ですから、ギリシャ神話を幼時好んで読んでおりましたので、これを一つ上げておこうと思います。そして、これも伝記であると考えれば、ソクラテスの弁明を、そして、同じ著者の国家論を一つに数えておきます。しかしこれは文学じゃなくて、哲学か政治思想の論文だと思えます。彼らは文学より哲学、政治思想を尊重してきたのだとおもいます。西洋の言語はコミュニケーションの手段として発達し、日本語は表現する言葉として発達してきたと言われております。ですから、月の呼び方さえ百以上あるそうですし、雨も雪も同じことです。万葉集の時代から詩歌を連ね、古事記に神々を書き残しました。

西洋の名作を考えてみると、まずドン・キホーテではないでしょうか。あのことわざとか決まり文句をこれでもかと連ねるところにうんざりしましたが、それも面白い。さらになんといってもシェイクスピアを挙げねばなりません。戯曲ではありますが、これは名作。四大喜劇も四大悲劇もすべて名作です。じつはこれが一番と思っています。ところが、ここから思い浮かばない。ロマンローランはその文体が、まるでオーケストラのようでびっくりしました。ドストエフスキーとトルストイ。罪と罰とかカラマーゾフの兄弟ではなく、私は地下室の手記が一番印象に残っていますし、戦争と平和ではなくアンナカレーニナが好きでした。ツルゲーネフの父と子は読み

ながら涙があふれたことを覚えています。ディケンズとモームもいいのですが、これはクリスマスキャロル。そして、ガリバー旅行記と宝島、ロビンソンクルーソー。英国はまだあります。シャーロックホームズ。嵐が丘、不思議の国のアリス。子供のころ、勉強もせず読みふけりました。

アメリカを代表するといえば、ヘミングウェイでしょう。老人と海は名作でした。白鯨を挙げる人もいますが、それはそれでいいと思います。しかしエドガー・アラン・ポーは忘れてはいきません。トム・ソーヤは？です。若草物語は赤毛のアンの前で色褪せました。

と、ここまでを振り返ると、ベスト10ではなく、私の読書遍歴になってしまっていました。しかし、今まで何を読んできたかを、もう一度思い出して考えてみるのも大事かもしれません。これも終活といえさびしくなりますが、逆に、アア、あれはまだ読んでなかったと思い出します。読みそこねて、そのままになっていると思うと、心残りです。今日、社会科学としての経済学 一宇野弘藏(筑摩書房)を買ってきました。この本の一節に、社会科学としての経済学の方法論について、という章があります。東京大学教養学部での公演から、と副題がついております。私のゼミでの卒論のテーマが、社会科学の方法論について、というとんでもないテーマでした。本の四九ページ目から八七ページ目と、総数三八ページに及ぶ講演です。かの人にあってこの長さですから、一介の学生ごときに手に負える問題ではなかったと、この年にして思い知りました。しかし、この一章を読むためにだけでも、この本を買った意味があったと思っています。なお残してきた何かを、今ならもう一度手に乗せることはできると思います。振り返ってみてください。

私の最初の泉鏡花は、小説を読むことからではなく、歌舞伎でした。何気なく点けたテレビの番組が、途中からでしたが、天守物語でした。まだ中学生であったとおもいます。ですから、歌舞伎なんてそうそう分かるわけもなく、演技の上のこととはいえ、男が女の格好をして、裏声やくぐもった声を作って、女のまねをして演じてるのは、なんとも不自然でかつ作り事に見えて異様でした。しかし、不思議に引き込まれる思いからつい目が離せませんでした。色の付いた映像をおもいだしませんから、テレビは白黒だったとおもいます。それから考えると、いつごろかは想像がつきます。いまから約五十有余年前ということでした。

しかし、夏目漱石、森鷗外はともかく、幸田露伴と言ひ、芥川龍之介、国木田独歩、樋口一葉など、彼らは大変な教養人でありました。彼らには、主調底音としての江戸期の文学のみならず、底流にかの時代の人がおのずと身に着けていた素養、たしなみが違いました。